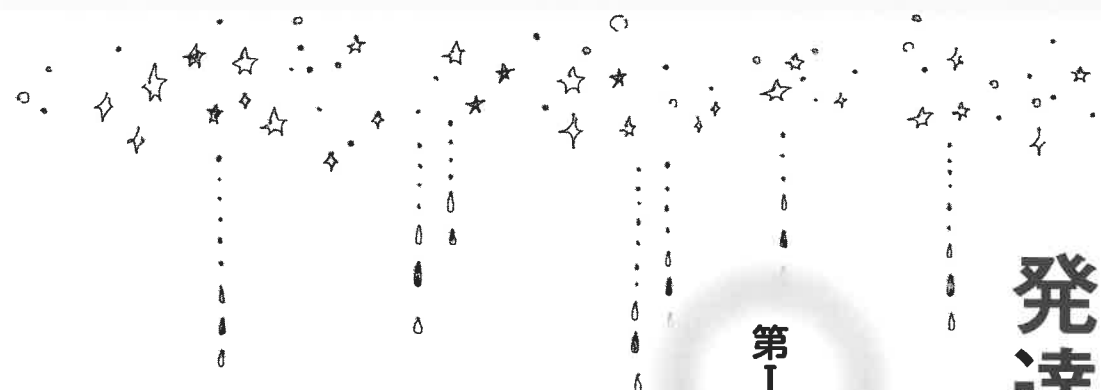




連載の解説版「もう一つの『発達の中の煌めき』」第四回は、こちらから見るすることができます。



発達の中の

煌めき

第I部

障害のある子ども・なかまの発達

白石正久 白石恵理子

しらいし まさひさ／1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在、龍谷大学名誉教授。

しらいし えりこ／1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在、滋賀大学教育学部教授。

第6回 「二次元の世界」を切り開く —「みかけの重度」の発達診断から

発達を理解するための方法の一つとして、私たちは発達検査を用いています。そして、子ども、なかまが検査課題に向きあい、試行錯誤しつつ自分を調整していくようすから、発達への理解を深めていきます。その活動を、発達診断ということがあります。それは、発達年齢や発達指数の算定を目的とするのではなく、発達へのねがいと、それゆえに生まれる矛盾や葛藤を探り、生活や教育のあり方を検討していくとくみです。

アヤちゃんと「給食の海苔」

アヤちゃんに初めて出会ったのは、四歳のときでした。難治性でんかんがあり、その発作はくりかえし現れました。頸は坐らず筋緊張が低いのですが、ふとした刺激でからだを反らせるように過緊張状態になりました。状態のよいときには、笑みにも似た柔らかな表情になりますが、それも長くはつづきませんでした。発達検査をおこなおうと、あおむけのアヤちゃんの胸の上に赤い輪を提示し、左右の方向への追視を誘いました（『新版・教育と保育のための発達診断（下）』四三ページ）。輪をみつけれ

ることがほとんどでした。あやしても微笑みを返してくれるような情動の変化をみることはできなかったもので、乳児期前半の発達の階層、しかもその初期の段階にあると発達診断していました。アヤちゃんが通園施設の年長組のとき、家庭訪問の機会を得ました。それは本当に驚きの時間でした。お姉さんが学校から持ち帰った「焼き海苔」の袋を手にして、給食のメニューの話を始めると、まどろんでいるように見えた彼女が、何度も頸を向き直し目を見開いて、その袋をみつめようとしたのです。お姉さんがそれを彼女の目の前に持つていくと、口を大きく開けて何かを言おうとしているようでした。「給食の海苔」と聞いて、アヤちゃんは特別な意味をみつ

け、それを確かめたかったのでしょう。「乳児期前半の発達の階層にある」という発達診断は、この姿とまったく整合しませんでした。この子の障害は重い、ゆえに発達の障害も重いという前提をもって、私はアヤちゃんと向きあっていました。

ひよつとするとアヤちゃんは話し言葉がわかり、見聞きすることに「心の窓」を開いて、もつといろいろと知ろうとし

ているのではないか。「給食」を一つの概念としてイメージでき、そのなかの「海苔」を知りたいとねがっているならば、二、三歳頃概念形成や関係認識をもっているのかもしれない。その発達段階で獲得される対比的概念の弁別もできるかもしれないと考えて、大小の●が描かれた「大小比較」の図版を見せて、「どちらが大きい丸ですか」と尋ねました。すると、彼女ははっきりと目を開き、視線で明瞭に「大」を選択してくれたのです。その大小の位置を逆にしても、確かに答えられました。その一生懸命さは、これが私の本当のことなのだと言っているようにも見えました。

「二次元の世界」と不確かさへの不安

八月号と「もう一つの『発達の中の煌めき』」第四回（全障研ホームページ「みんなのねがいWEB」内）で解説したように、「一歳半の節」では、「対」の事物・事象の間で「：ではない：だ」と一次元の可逆操作をし、自分の要求によって選択できるようになります。その「本当の要求」は他者の要求とのぶつかり合いを必然とするので、いっそう自分の要求を意識して要求し、自我をたくま

しくしていきます。だから「一歳半の節」を越えると、事物・事象のちがいに注目し、自分にとってより意味や価値があると思われるもの、たとえば「小さい」より「大きい」、「二歳」より「三歳」がうれしいのです。つまり「対」という性質に、「対比」や「比較」というもう一つの性質が加わった二次元的な視点によって、外界の事物・事象を区別し取り入れていくのです。そうして、対比的概念としての「大きい—小さい」などがわかるようになるのは、二歳後半からの発達段階になります。

「一歳半の節」の「：ではない：だ」に、このもう一つの性質が加わった「二次元の世界」を切り開いていく子どもたちは、からだや手指の運動、言葉、感情表現などを総動員して外界にはたらきかけ、たくさんを知り、自分にも手ごたえを感じて、もつと、「大きい自分」になりたいとねがうようになります。アヤちゃんのように、重い障害によって活動が制約されているのに、「二次元の世界」にある子どもたちがいることは、私たちの驚きでした。運動が制約され不自由であっても、精神は能動的に外界にはたらきかけ、もつと知ろうとしているの